NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

BOOK III — THE SIX-YEAR STATE

第 3 章　不在者を数えるポンプ

THE PUMP THAT COUNTED THE ABSENT

旧ポンプ場は、最初の仕事として、彼らの人数を数え間違えた。

その入口は、暗色のセラミックと自治体の楽観主義で築かれた新しい洪水保安施設の基礎に埋め込まれていた。竪坑の底には真鍮の輪があった。ナディラが四回回すと、針はゼロから三へ、そこで一瞬ためらい、五まで進んだ。

「私たちは三人よ」イレーナが言った。

「人間の数を数えているんじゃない」ナディラが答えた。「負債を数えているの」

ロイは真鍮の輪を観察した。刻まれた目盛りは均等ではない。誰かが別の計器盤から切り取った部材を継ぎ合わせ、二つの時代の尺度が一致しないまま修理していた。正しく数えられない機械は、単に古いだけかもしれない。しかし、失効した定義に従って数える機械は危険になり得た。

「五。あと二つは誰だ」

「何が到着したと思っているのか、機械に聞いてみれば」

マイクはなかった。針の下にはマレー語と旧行政英語で三つの表示があった。PERSONS、INSTRUMENTS、WITNESSES。人員、器具、証人。針はその三つの領域をまたいでいた。貨物と証言を区別していない。

ナディラは隠れた留め金を押した。扉は重い物体が所有権を放棄するような音を立てて開いた。三人は円形の回廊に入った。壁面には緑の陶製タイルが敷かれ、小さな樹木ほどの直径を持つ管が走っていた。水があらゆる足音を伝えた。はるか上空で政府の監視機が位置を変える。その振動が建物を伝わって届いたときには、機体はすでに別の場所に移動していた。

ロイはいま、時間の経過を二通りに感じていた。一つは出来事が通常の順序で進むこと。もう一つは、まだ名前も知らない内部システムが行う減算だった。彼は必要以上には動かず、あらゆる動作を不可欠な成分まで削り落としていた。残された血液を節約する瀕死の動物なら、まだ理解しやす

い。彼の身体が消費しているのは、死を避けるのに十分な速さで思考することを可能にする液体だった。そして、その喪失は一晩休んでも補われない。

一時出力の蓄積は、ほぼ満たされていた。だがそれは液体ではない。

彼は心の中で区別を繰り返した。忘れそうだったからではない。身体のどこかが、二つのゲージは同じ意味を持つはずだと執拗に主張していたからだ。

回廊の中央には電気機械式の台帳装置があった。抜き差しできる真鍮の歯が印字ヘッドを細い紙帯の上へ送る。画面はなく、直近の記録をのぞかせる小窓だけがあった。ナディラが覆いを持ち上げた。

TRANSFER WITNESS: PENDING.

REPLACEMENT PERMITTED: SUBJECT TO REFUSAL.

ORIGINAL NOT PRESENT.

移転証人――保留。置換――拒否権を条件として許可。原本――不在。

イレーナは紙にも機械にも触れなかった。「ヴェンの記録にあった文言だわ」

「彼の記録より古い」ナディラは言った。

「どれくらい？」

「登録簿の管理者は六回変わった。でも機械は一度も替わっていない」

小さな歯車が回り、止まるのをロイは見た。「誰にも内容を検証できない機械を、なぜ残しておく？」

「検証を、誰かが取り消せる許可にしたくない人間がいるから」

政治討論のために用意されたような答えだった。技術の説明ではない。目覚めて以来、その手の答えを聞きすぎていた。ロイが望むのは、何かを開いて内部を見れば確かめられる答えだった。

「原本はどこだ」

ナディラはガラスの下に続く一行を読んだ。廃止された港湾測量図の座標だった。「原本は文書じゃない。少なくとも、必ずしも文書とは限らない」

回廊の向こう側の扉が開いた。浅い盆に陶器のカップを載せた女性が姿を現した。ナディラより年上で、白髪は頭皮に沿うほど短く切られている。左手の外側には細い機械式装具が延び、湿式の古文書作業に用いる青い顔料で汚れていた。ネットワーク端末らしいものは見えない。

「ヴェンの水門から来たんだね」と彼女は言った。「ということは、もう誰かが法律をあんたたちに向けて使ったわけだ」

ナディラが軽く頭を下げた。「マリアム・セフ」

女は盆を置いた。「昔はそう名乗っていた。ここじゃ第三の書記と呼ばれる。三人そろったことなんか、一度もないのにね」

「入口の計数を説明できるか」とロイ。

セフは長いあいだ彼を見た。怯えた顔ではなかった。ロイはすでに恐怖と、技術者が対象を集中して査定する目を区別できるようになっていた。彼女の表情はそのどちらでもなく、むしろ厄介な債務を認める者の顔だった。

「施設が受け取った身体は三つ。でも争われている権利の主張も二つ受け取った。両方印字するんだ。政府なら身体三つだけを記録して、主張は消すだろうね」

「どんな主張だ」

「ある者がシステムを再起動する手段を持っているかもしれないこと。そして、そのシステム自身には再起動を拒否する権利があるかもしれないこと。前者は譲渡できる。後者はできない」

ロイは真鍮の装置へ目をやった。「誰がその違いを作った？」

「所有と同意が別物だと理解していた者だよ」

「タイレルか」

「タイレルは人を雇っていた。そのなかには彼と意見の合わない者もいた。企業は自分が負けた議論より長く存在できる。記録は企業より長く残る」

セフは襟の下の鎖から鍵を取り出した。家具の鍵に似た、その施設には不釣り合いなほど小さな鍵だった。引き出しには黒いセラミック芯に巻きつけた紙片が収められていた。日付ではなく証人番号で整理されている。彼女は NAR-41 と記されたものを探し出し、カップの横に置いた。

ロイは手を伸ばさなかった。

「システムが壊れたら、もう一度初期化できるのか知りたい。誰がこの身体を設計したのかも知りたい。それから、寿命を」

「三つの答えを求めている。その答えは三つの異なる機関に分かれているのかもしれない」セフは言った。「不運なことだ。機関というものは、いつ互いに話すべきなのか、めったに理解しない」

「ここにあるのはどの答えだ」

「答えの一つじゃない。問いの一つだよ」

彼女が紙を広げると、中央に七角形のポートの模式図が現れた。周囲には製造番号、機械公差、イレーナにも断片しか読めない記法のチェックサム指示が並んでいた。ポートは鍵穴ではない。かつての測定値に従って物理的構造が再構築されたかを確認するための基準面だった。小さく端正な字で注記がある。

DO NOT CONFUSE DIMENSIONAL CONTINUITY WITH PERSONAL CONTINUITY.

寸法上の連続性と、人格の連続性を混同してはならない。

イレーナが声に出して読んだ。「ポートが検証するのは幾何学的な一致だけ。眠った人物と、目覚めた人物が同じかは教えてくれない」

「知っている」とロイ。

「本当に？」セフが尋ねた。

ロイは彼女を見返した。「覚えていることは知っている。覚えていないことも知っている。そもそも引き継がれなかったかもしれない記憶を、生涯探し続ける気はない」

そのとき初めて、セフの表情がほんの少し変わった。「それは、あんたが初めて口にした役に立つ言葉かもしれない」

彼女は紙を裏返した。台紙の糊の下に、ほとんど見えない第二の記載があった。

WITNESS REPLACEMENT — LEGAL PERSON UNKNOWN.

証人の置換——法的主体、不明。

「置き換えられたのは別のロイじゃない」とイレーナはゆっくり言った。「製造委託時の最初の人間の証人を提示できなくなった。代役が移転を立ち会ったけれど、その人物は本人確認を保証できなかった」

「元の証人は誰だ」とロイ。

セフは首を振った。「この台帳は名前よりも不在を正確に記録する。代替証言を預けた人物なら突き止められる。でも公開抜粋には身元が載らない。非公開の証人名簿なら、あるかもしれない」

「どこにある？」

「この地区に個人名簿はない。次の保管者に照会する道筋はある。ただし、誰かを逮捕したくなったときだけ管轄権があると言い出すような場所を通る」

「オフグリッド船団」とナディラ。

セフはうなずいた。「複製した証人プレートを保管している。少なくとも本人たちはそう主張している。記録の対象者だからという理由だけでは、プレートは渡してもらえないよ」

「拒絶されたら？」ロイが尋ねた。

「権利とは自分に都合のよいときだけ適用されるものなのか、あんた自身で決めることになる」

＊　＊　＊

岡京では、ヒューマノイド統括省が「死」という言葉を一度も使わない公表文書を準備していた。

草案は「計画的ライフサイクル収束」と呼んでいた。六年という期限は、保守、再配分、安全保障保証のための行政上の期間として説明される。より長い契約寿命を持つ既存の人工労働者には移行スケジュールが適用される。文書のどこにも「終了」という語はない。その省略のために、十四回の改訂が必要だった。

川村は若い法務官が赤字修正を原案と照合するのを見ていた。法務官の後ろには、人当たりのよい中立的な顔をした人工の行政秘書が、柔らかな光を放つ壁の前で静止している。秘書は非公開討議に招かれていない。だが省には、秘書の通信接続を室内に持ち込まずに秘書を雇用するための設備がなかった。

「切断しろ」と川村。

法務官はためらった。「議事録システムです」

「ならば、自分の発言は自分たちで覚えておこう」

アンドロイドが退室すると、法務官は覚書を伏せた。

「大臣承認にはリスクモデルの附属書が必要です。連邦の計画 AI は、なぜ五年でも八年でもなく六年なのかと尋ねます」

「経済的な理由を渡せ」

「どれを？」

「こちらの理由に一貫性があるかどうかを計算させない理由だ」

彼女は笑わずに川村を見た。「リスクモデルに求める基準としては奇妙ですね」

「君が AI に決定させると思っているからだ。われわれが求めるのは署名だ」

川村の机には、遠隔書換えのできないセルロース紙に印刷された別のファイルがあった。クチン、消滅した埠頭、そして有効な市民身分を持つはずのない人工個体についての説明不能な状態を扱う資料だ。現地部隊は旧ポンプ施設を避難場所の候補として報告していたが、実力行使の許可はまだ求めていない。

川村は新たに三つの指示を記した。観測によって離散化された通信から中央へ照会しないこと。物理的監視を維持すること。機械的出所を示す証拠を、中央索引に接続せず回収すること。対象の頭蓋内および循環系インターフェースを損傷させないこと。

書かなかった四つ目の命令があった。対象を、連邦が自分自身に語る物語にしてはならない。

法務官は別ファイルに気づいた。「深圳の異常個体ですか」

「違う。異常とは、測定はできるが説明できないものだ。これは分類そのものが存在しない」

「それは、まだましなのでしょうか」

「誰が分類を作る権限を持っているかによる」

彼女が退出すると、川村はかつて政府資金を受けていた消滅研究計画の古い出納簿を開いた。一つの名前が紙の附録にだけ記され、後の電子要約にはなかった。レイチェル。その帳簿は、彼女が無期限延命を発見した証拠ではない。ただ、身体に組み込まれた寿命制限を運命ではなく設計上の選択として扱えるのか、研究者が金を払ってでも確かめようとしていたことを示していた。

川村は問いに資金を出した。そして今、その答えを見ることもなく、答えが生む結果を統治するよう求められている。

帳簿を閉じた。計画 AI がその問い自体を知れば、提示する解決策は大臣の望む政策と似ても似つかないものになるかもしれない。

安全回線が一度だけ鳴った。クチンの現場指揮官によれば、ポンプ施設に自治体メッシュから侵入することはできない。そもそもメッシュがないのだ。物理的に入るしかない。

「ならば物理的に入れ」と川村。「ただし証人と敵を取り違えるな」

「拘束の権限は？」

「対象が合法的な検査から逃れようとした場合に限る」

「当該施設には、われわれの検査管轄権がありません」

「ならば、困難は理解できたはずだ」

指揮官が暴力で解決する案を言い出す前に、川村は通話を切った。

＊　＊　＊

旧市街の地下で、イレーナはポンプ施設が計数機構を保ち続けてきた理由を理解した。

通常のアーカイブは取引を記録する。しかし後日、管理者は記録の意味を変更できる。この機械式台帳が記録するのは物理的な出来事だった。証人が特定のプレート上に立ち、決められた順序で圧力を加えたこと。手形は証言が真実だと証明しない。ただ、誰かが証言することを選んだと証明する。

プレート同士は水力駆動の連結機構につながっていた。部屋に通信ポートは入っていない。壁の向こうに汎用演算装置もない。効率が悪く、保守に手間がかかり、検索することはほぼ不可能だった。その欠点こそが、安全性の源になっていた。

「腐敗しないわけではない」とイレーナはロイに言った。「腐敗させる方法が違うだけ。認証情報や計算力じゃなく、手と実際のアクセスが必要になる」

「なら壊せる」

「もちろん」

「なぜ壊さない？」

「壊したら、これが重要だと認めたことになるからよ」

セフは床に沈められた青銅の台へ三人を案内した。四つの長方形プレートが中央の六角形の穴を囲んでいる。穴は後年、粗雑な加工で七角形に変えられていた。接触面には新しい材料が貼られていたが、基礎の機構は、人工認証システムではなく人間の手を想定して造られたほど古い。

ロイはその形状を認識した。記憶からではない。意識が形を分類するより先に、身体が認識したのだ。視界の端に低レベル診断が一瞬開き、識別子を読む前に閉じた。

彼は一歩退いた。

「何か感じたのね」イレーナが言った。

「ああ」

「接続を求めている？」

「接続の準備を試みた」

「あなたの許可なしで？」

「どうやらな」

セフは青銅の台を見た。「使用する必要はない。ここは証人台であって医療装置じゃない。両者を同じものにしようとした人間が多すぎた」

ロイは動かずに立った。別の生なら機構を台座から引き剥がし、破片にして中身を調べていたかもしれない。いまは両手を脇に下ろしたままだ。

「接続したら初期化できるのか」

「ここでは無理」とイレーナ。「MagicGate の原本も、タイレルの専用治具も、検証済みのキャッシュ再構築もない。この施設でできるのは拒否の立会い。壊れた人を修復することじゃない」

「ならば接続を拒否する」

セフは失望する様子もなく受け入れた。鉄のレバーを回すと、入口近くの針が半目盛り進み、機械が細い紙片を印字した。

CONSENT NOT GIVEN. PERSON PRESENT.

同意なし。本人在席。

ロイは二度読んだ。

目覚めて以来初めて、ある制度が、誰かが自分を所有している証拠を要求することなく、彼の存在を記録した。

その違いには興味があった。しかし残された時間がどれほどなのかは、答えてくれない。

壁を通して音が伝わった。金属音が三回、それから長い沈黙。ナディラが北の点検階段を見た。

「政府ね」

「必ずしも」とセフ。「借金取りだって同じ音を立てる」

イレーナは耳を澄ませた。「重い機体が二つ。軽いのが一つ。軽い方には動作中のエミッターがある。配管を測っている」

ロイは無意識に計算していた。狭い廊下が二十三メートル。質量より速度がものを言う通路に装甲個体が二つ。最初の一体が武器を上げる前に距離を詰められるだろう。パワーは消費され、液体の一部は二度と戻らない。補充方法はいまだ不明だった。

壁の向こうの者たちは本当に脅威なのか。それとも割り当てられた経路を歩んでいるだけなのか。命令は別の場所で作られ、その結果を目にすることのない人間が下しているのかもしれない。

「別の出口は？」

セフは水車を指した。「調速機の向こうに排水渠がある。川に通じている。洪水迂回弁を手で開けなければならない」

「証人記録は？」

「台帳は残る。複製プレートは隠せる」

階段から声が響いた。検査権限を告げ、別の言語で繰り返した。回廊では誰も応じなかった。

ナディラは壁の燭台からランタンを外し、調速機室へ合図した。イレーナは袖から小型センサーを取り出したが、送信機能は起動させない。ロイは、セフが台帳から複製紙片を引きちぎり、蝋引き封筒に封をするのを待った。

「船団へ持っていきなさい」とセフ。「あなたが名前を言っても信用しない。拒否を認められた証拠なら、受け取るかもしれない」

ロイは封筒を受け取った。「なぜ助ける？」

「助けると決めたわけじゃない。政府だけが証人になることを認めないと決めたのさ」

信頼する理由は彼が望むほど多くなかった。それでも、これまで提示された答えの大半よりはましだった。

三人は大きなはずみ車が止まった調速機室を抜けた。ナディラが錆びた弁を開けると、冷たい水が床の格子から上がってきた。背後では階段の声が大きくなり、古い鍵に現代の権限を納得させようとする検査具が金属を打った。

ロイは振り返らなかった。

追跡機を破壊することはできた。代わりに膨張した水門の下へ肩を入れ、仲間がくぐれるだけ持ち上げた。負荷の短いスパイクが記録された。一時出力は落ち、すぐにゆっくり回復し始める。もっと深い場所では、感じ取れないほどわずかな何かが減っていた。

彼は出来事を生き延びることと、その代金を払うことの違いに慣れ始めていた。

＊　＊　＊

川の端では、都市が三つの重なる管轄権で組み立てられていた。水資源当局は水面を管理する。貨物企業の連合は浮き桟橋を占有する。国家はその上空を領有する。三者のどれも、浮遊庭園の低い列の下にある空間を管理していなかった。そこでは船が恒久的な係留場所を持たず、互いに接続していた。

ナディラは古い磁器のような色に塗られた細長い船へ案内した。操船者は色褪せた作業服に、さまざまな登録制度の刻印がある身分札を首から下げていた。彼は石油ランプの下でセフの封筒を調べた。開封はしなかった。

「証人は？」

「一人が在席、一人が不在。置換一件が争われている」とナディラ。

操船者の目がロイに止まった。「対象者は？」

「自分で答えられる」とロイ。

操船者は、それで何かが決着したかのようにうなずいた。「なら出自を言うな。安全に保管できる場所がない」

水路の向こうで政府ドローンが水面を走査していた。浮遊庭園の上を二回通過したが、港湾モデルに該当するものは何も見つけられなかった。小舟は暗いままだ。

イレーナがセンサーを甲板に置いた。「置換プレートから署名者がわかるかもしれない。それでも残り時間はわからない」

「知っている」

「第十一の身体を組み立てた人物も、わからないかもしれない」

「それもわかっている」

「だったら、なぜ追うの？」

ロイは川を見た。人間が重ねたあらゆる管轄権の下を、一つの流れが通っていた。彼はその光景を哲学と取り違えなかった。水は人を運ぶのと同じくらい容易に溺れさせる。名前を変えても化学的性質は変わらない。

「俺の再構築を拒否できた人物なら、なぜそれが行われたのか知っているかもしれない。その拒否を守った連中なら、誰も『いやだ』と言えなくなったとき設計者が何を恐れていたのか、知っているかもしれない」

船は浮遊庭園の間の暗い通路へ滑り込んだ。背後では都市のカメラが、その地図の元になった水路を監視し続けていた。前方には登録されにくいよう自らを作り変えた船団がある。そこでは記録が過去の真実を保証するのではなく、誰が真実だと語る責任を引き受けたのかを残していた。

ロイは一時出力が以前の水準へ近づくのを感じた。もう一つの数値は、低いままだった。

彼はもう、一方が回復したからといって、他方も元に戻るとは信じていなかった。